

《研究ノート》

聖ベネディクト会修道院と韓国の一地域社会

——韓国慶尚北道漆谷郡倭館邑への定着過程をめぐって——

秀 村 研 二

本稿は私が現在おこなっている韓国の一地方小都市である慶尚北道漆谷郡倭館邑(왜관읍: ウェグァン・ウプ)におけるカトリシズムに関する文化人類学的研究の一部として、この地域のカトリックに大きな影響力をもつ修道院の存在について、特にその定着をめぐって修道院の通史である『芬道通史』[마르, 요한네스 2009]を通して概観しようとするものである¹⁾。まず言葉の整理をしておこう。韓国ではカトリシズムのことを天主教(천주교: チョンジュキョ)と言うが、本稿では日本での用法に合わせて、信仰全体や宗教や信者を含めてカトリックと表し、それぞれに説明が必要に場合にはカトリック教会、カトリック信者と表記する。また個別のカトリック教会のことを韓国では聖堂(성당: ソンダン)または教会(교회: キョフエ)というので、本稿ではそのまま聖堂もしくは教会と表記する(日本のカトリック信者たちは御堂〈おみどう〉ということが多い)。また現在の大韓民国の首都であるソウルは、朝鮮王朝期は漢陽(ハニャン)もしくは漢城(ハンソン)であり、日本の植民地統治期には京城とされたが、本稿では1945年以降の名称であるソウルに統一しておく。

韓国のカトリック信者数は2015年の「人口住宅調査」によると約390万人で、全人口約5000万人の7.9%を占める。なお仏教徒は約762万人で15.5%、プロテスタントは約968万人で19.7%である。²⁾本稿で取り扱う漆谷郡の人口は2017年には約12万人でカトリック信者は約1万人で約8%となり全国平均である。ところが倭館邑(邑: ウプは行政単位で日本の町にあたる)だけを見ても、人口3万2千人に対して信者数は5千名となり比率は16%と全国平均の2倍である³⁾。この信者数の多さの要因の一つが修道院の存在であると考えられるのだが、まずは修道院の韓国進出と展開について述べる。

ベネディクト修道会はカトリック教会の聖人である聖ベネディクト(480年頃～547年)が著したとされる「ベネディクト規則書」に則った修道生活をめざす修道会をさし、古くは6世紀にベネディクトによってモンテ・カッシーノに設立されたベネディクト会にまで遡る。本稿が対象とするのは1884年にドイツで海外宣教のためにアムライン神父によって設立された聖ベネディクト会オティリエン修道院によって韓国に設立された修道会である。オティリエン修道会はまずドイツ領東アフリカ(現タンザニア)で布教活動をおこない、聖堂(カトリック教会)での宣教活動を中心にして活動した。現在では15の修道院からなる連合会(オティリエン連合会)を形成しており、会員数が1000名を少し越える。⁴⁾

1. 聖ベネディクト修道会の韓国進出と展開

オテリエン連合会が韓国での活動を始めたのは20世紀初めに天主教朝鮮教区長であったムテル主教 (Mutel) の要請によるものであった。それはローマ教皇庁が朝鮮教区で活動する男子修道会を探していたムテル主教に対して、東アフリカでの布教活動を積極的におこなっているオテリエン連合会を評価して推薦したからだった。1908年のことである。当時の朝鮮(国号は大韓帝国)は、日露戦争からの日本による保護国化が進行中であり、1910年に植民地となるその直前であった。

1909年栢洞(現在のソウル恵化洞)に約3万坪の敷地を購入し、1911年に石造り3階建のソウル聖ベネディクト会修道院が完成した。1913年には大修道院長(Abbas)を擁する修道院となっている。1910年9月に韓国進出の目的であった崇工学校を設立して木工、鉄工、園芸などの実業教育を始めた。また教員養成の師範教育をめざして1911年に崇信学校も設立するが、教員養成を管理する総督府の許可を得られず廃校となった。また当時の朝鮮のカトリック教会ではフランス海外宣教会の影響が強く、オテリエン修道会が東アフリカでおこなったような聖堂への司祭派遣はフランス人神父たちの反対でままならなかった。これには第1次世界大戦によるドイツ系の宣教会に対する態度の変化という影響もあったかとも考えられる。このような点からもベネディクト修道会は当初の目的を達成できずにいて他地域での活動を模索していた。当時新しい教区として朝鮮半島北部(感興南道)から中国の間島(간도: カンド=現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州)にかけて元山(원산: ウォンサン)代牧区(後の元山教区)が創立され、この地域での宣教を委託されたのを機会にソウルから感興南道德源(現在の元山市内)に拠点を移すことになり、そのため1922年に崇工学校は廃止された。

徳源(덕원: トグオン)聖ベネディクト修道院は1926年に工事が始まり1927年に完成する。これにはオテリエン連合会としては第1次世界大戦のために東アフリカでの宣教が出来なくなったため、朝鮮での布教活動への関心が強まっていたことも影響していたと考えられる。元山教区は1920年に教皇庁から設置が認められ、司祭の派遣がベネディクト修道会に求められた。1922年の統計では、ドイツ人神父14名、ドイツ人修道士が9名、韓国人修道士が3名であり、教区内の信者数は7500名であった。パリ外邦宣教会から引き継いだ聖堂は5カ所であった。また1928年には神学校も設立され、徳源修道院は修道生活と共に、神父を聖堂に司祭として派遣する司牧、神学校運営をとうしての教育活動などをおこなっていた。ドイツ人を中心とした修道会であるために、修道院の活動は様々な新しい技術などが地域社会に伝えられる場ともなっていた。元山教区は1940年には12の聖堂、公所(공소: コンソ=司祭が常駐しない会堂)が89カ所、信者数が11,004名となり、神父が34名(ベネディクト会会員は29名、韓国人の教区所属神父が5人)であった。また徳源修道院には出版と印刷の施設が設けられドイツから印刷機が持ち込まれ、カトリック教会で使用される様々な教本、問答集、聖歌集などが印刷出版された。

徳源修道院は1945年8月に日本の敗戦による植民地からの解放を迎え、ソ連軍の勢力下におかれ、ソ連軍が修道院に駐屯した。1946年に実施された土地改革で地主であった修道院の土地は解放され、1949年5月9日に神父・修道士が逮捕された。朝鮮戦争が始まった後、1950年10月にドイツ人神父6名と韓国人神父5名が処刑され、修道院長を初めとする18名の神父・修道士たちが収容所

で死亡した。朝鮮戦争休戦後の1954年1月、生き残ったドイツ人神父・修道士42名がドイツに送還された。

一方、間島には朝鮮王朝末期から日本の植民地統治期にかけて多くの人々が朝鮮半島から移住をし、1922年には50万人以上にもなっていた。カトリック教会ではこの地域を元山教区の管轄にしていたことは述べたが、朝鮮半島からの移住者の信者約8000名と中国人信者約12000名がおり、徳源ベネディクト会修道院の神父たちはこの信者たちへの司牧も担当することになっていた。そのために延吉(연길: ヨンギル = 現在の中国吉林省朝鮮族自治州の中心都市)に修道院の分院を1922年に設立する。つまりソウル・ベネディクト会修道院はソウルから元山に移転するに際して、本院である徳源修道院と分院の延吉修道院の二つになった。この移転に際して資金がどのような形で供給されたのかについてはまだ寡聞にして不明であるので、今後の課題としたい。

1928年には元山教区から分離する形で延吉支牧区が設けられ、その中心として延吉修道院は機能することになる。1934年には大修道院長を擁する修道院に昇格したので徳源修道院と同格となり、分院ではなくなった。また1937年には延吉支牧区が代牧区に昇格することにより、修道院の大修道院長が教区の主教ともなった。このように役割が拡大するにつれてドイツの修道院から追加で修道士が派遣された。この修道院でも木工、鉄工、印刷などの作業がおこなわれた。また初等教育機関として海星(ヘソン)学校が、各聖堂や公所に付設され、1944年には学生数が全部で3000名にもなったという。これらの教育や女性への布教のためにベネディクト会女子修道院も進出して修道女たちが派遣されているが、女子修道院は別の修道院なので、本稿ではそれには触れない。

1946年4月に、延吉代牧区は教区に昇格して中国のカトリック教会の一部となるが、共産党政権のもとで活動は制限を受けることになった。同年5月にドイツ人神父が逮捕投獄され、14の聖堂のうち活動を続けられたのは朝鮮人神父がいた聖堂だけであった。投獄されていた神父たちは、釈放されドイツに送還されたが、修道院長であり主教であったブレハ神父は延吉修道院に戻った後、1950年に死亡した。またその後に残っていた韓国人神父や修道士も韓国に逃れた。このようにして感興南北道と延吉でのベネディクト会修道院は、40名近い犠牲者を出してその活動を終えた。

2. 韓国での修道院再建と活動

このように徳源や延吉の修道院にいたドイツ人神父はドイツに帰ったが、韓国人の神父、修道士や神学生たちは避難してきた韓国内で合流して、朝鮮戦争時の釜山で共同の生活をはじめていた。1951年アメリカを訪問中だったオティリエン修道院の大修道院長が徳源修道院に所属していたスイス人神父ビテルリから韓国内にいる修道士たちともう一度修道院を作りたいという希望を聞き、韓国での活動の再開が始まることになる。

ビテリ神父は1952年1月にまだ朝鮮戦争中の韓国に行き、釜山にいた20数名の韓国人ベネディクト修道会会員と大邱(テグ)の主教館で共同生活を始めた。なぜ釜山でなく大邱での活動再開であったのかについては今後の課題である。ビテリ神父は当時の大邱教区長から倭館(왜관: ウェグアン)地域の司牧を担当して欲しい旨の提案を受けた。それを受けて1952年6月に倭館聖堂と佳室(가실: カシル)聖堂の司牧を始めた。なおこの倭館地域は大邱に隣接している地域であり、朝

鮮戦争初期には北朝鮮軍が倭館が接している洛東江にまで攻撃進出してきたが、国連軍（主力は米軍）が洛東江を死守し、北朝鮮軍のそれ以上の侵攻を許さなかった激戦場でもある。当時の倭館は農業以外には産業のない農村地帯であり、倭館はその中心の町であった。ただ交通の要所であり植民地時代に開通したソウルと釜山を結ぶ京釜線は倭館を通り、駅も設けられていた。

この地域のカトリック信者の歴史は19世紀初めに迫害を逃れてきた信者たちによって始まり、1894年に洛東江岸の渡し場があった場所に、フランス人神父によって洛山(낙산: ナクサン) 聖堂が建てられた。現在の佳室聖堂である。信者数の増加によって倭館(ウエグアン) 聖堂が建てられたのは1929年であった。

倭館で再出発を果たした修道院は倭館聖堂の近くにあった建物を使用しての共同生活であった。倭館駅裏手の広大な地域は当時から現在に至るまでアメリカ軍の補給部隊基地として使用されており、当時の倭館聖堂もそれに隣接していた。

1953年に倭館地域が大邱教区から分離した監牧代理区になり、1955年には当時の倭館聖堂の横の丘の上に修道院の建物が建築された。これに合わせてドイツにいた旧徳源修道院と旧延吉修道院に所属していた神父たちが韓国に戻どり、それを機会に修道院はローマ教皇庁から正式の修道院として再び認可された。またそれと同時に修道院が司牧を担当する範囲も拡大することになった。1955年にはそれまで大邱教区が運営していた倭館の純心(순심: スンシム) 中・高等学校の運営が修道院に引き渡された。また出版事業は徳源や延吉でもおこなっていたが、1960年に芬道出版社と印刷所が設立され、ドイツからの最新の印刷機械を輸入しての修道院だけではなく韓国のカトリック教会全体の出版物を数多く印刷、出版することになる。そしてまた木工所、鉄工所などが設けられて作業をし、農場も作られ農業用機械を使った現代的な農場経営もおこなわれた。そのために倭館地域の住民が働く雇用先ともなったのである。それは地域住民にとっては、カトリック教会を身近にするものでもあった。

1964年には修道院の近くに「避静の家」(피정의 집 :retreat house) が設けられ信者の霊的な訓練の場や、祈りの場所とされた。このような信者のための施設は韓国では初めての試みであり、倭館修道院が果たした先駆的な役割であったとも考えられる。この後、会員数の増加もあり釜山やソウルに分院が設けられ、それらの分院にもこの「避静の家」が併設された。

聖堂での司牧も1956年には6つの郡にある8カ所の聖堂であったのが、1964年には担当する聖堂数が18に増えた。また新しく設立された聖堂の建築は修道院所属の建築家であるアルビン神父が主に設計したが、それは第2バチカン公会議後のカトリック教会の新しい信仰を反映させるものでもあった。⁵⁾

このような活動を経て1964年に倭館修道院は大修道院長を擁する修道院と再びなった。1996年には終身所願者が96名であり、外国人神父を含めて神父(司祭会員)が47名、修道士(修道士会員)が外国人4名を含めて49名である。現在は自立した修道院となっているため、ドイツから新しい神父などが派遣されることはなくなっている。またその他の会員も含めて修道院に所属する会員は総数で131名であった。

3. 倭館での定着と展開に関して～まとめに代えて

以上、簡単に述べてきたように聖ベネディクト会修道院は20世紀の激動の朝鮮半島の歴史を映す鏡のように、ソウルから徳源や延吉に移り共産党政府や朝鮮戦争のために苦難を経験し、その後再び倭館の地に再定着を果たし、地域と密着した活動をおこなってきた。現在おこなっているのは木工所、金属工芸工房、スタンドグラス工房、印刷所、出版社、ハム工場（ドイツ式ハム）などであり、それぞれに地域の住民が信者、非信者の区別なく職員として雇用されている。以前は大きな農場を経営していたが、倭館地域が大都市である大邱や1970年代に工業都市として開発された亀尾（クミ）のベットタウンとなるとともに人口が増え、大きなアパート団地の造成を計画した建築会社に売り払われた。作物は現在では修道院の敷地内だけで栽培されており、収穫物は全て修道院内で消費されている。

もう一つの大きな役割として教育があげられる。オティリエン修道院が韓国に進出するときから学校教育を大きな柱として据えられ、それは徳源延吉でも受け継がれてきた。学校経営は倭館修道院でもなされており、純心中学校、純心高等学校、純心女子中高等学校という三つの学校を修道院が純心財団をとうして運営している。特筆すべきなのは倭館地域においてはこの学校が唯一の高等学校であり、倭館地域には高等学校の卒業生の濃密なネットワークが張り巡らされている点である。このことについては稿を改めて述べる予定である。

聖堂に神父を派遣する司牧活動は現在では縮小され、倭館邑内の三つの聖堂（倭館聖堂、佳室聖堂、石田聖堂）のみとなっている。興味深いのは信者たちの態度で、自分たちのことを「私たちは教区の聖堂の信者ではなく修道院の聖堂の信者だ」というアイデンティティを強く持っているという点である。修道院が倭館地域に定着してから地域社会とさまざまな交流を繰り返す中でこのような自己認識が生まれてきている。つまり修道院から見ると地域社会への定着過程であったが、他方、地域社会に属する信者から見れば自意識形成の過程であったともいえるであろう。この点についても稿を代えて論じる予定である。

注

- 1) 芬道（**분도**: ブンド）はベネディクトの漢訳である。本稿は科学研究費15K03033「生き方の文化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究：韓国社会の事例を中心に」（研究代表者：本田洋）の研究分担者としての研究成果の一部である。また倭館地域のカトリック信者については〔秀村 2016〕倭館聖堂については〔秀村 2018〕でも取り上げている。
- 2) カトリック信者数は洗礼を受けて信者だと認識している数であるが、教会の儀礼（ミサ）に参加しているのはおよそ三分の一程度である。
- 3) 全国平均の2倍の信者数がなぜ倭館邑に在るかについての考察は今後の課題でもある。
- 4) 韓国教会史研究所『韓国カトリック大事典』5巻。
- 5) この点については文化財として登録された倭館聖堂を例として簡単に触れておいた。〔秀村 2018〕

参考文献

- 韓国教会史研究所編『韓国カトリック大事典』5巻、2004年、pp.3292-3293（韓国語）。
 秀村研二 2016 「韓国キリスト教会における生き方の変化：プロテスタントとカトリックという生き方をめぐって（特集 韓国社会の生き方：早期留学、改宗、農村移住）」『韓国朝鮮文化研究：研究紀要』15、東京大学

- 院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室、pp.172-162。
- 秀村研二 2018 「ある文化財指定をめぐる」『韓国朝鮮の文化と社会』17号、韓国朝鮮文化研究会、pp.173-179。
- 마르, 요한네스 2009 『芬道通史: 오티리아 연합회 한국 진출 100주년 기념』 분도출판사。
(マルー、ヨハネス 2009 『芬道通史: オティリア連合会韓国進出100周年記念』芬道出版社)